母権論（連載第七回）　エジプト（三）

ヨハン・ヤーコプ・バッハオーフェン
佐藤　信行・三浦　淳・桑原　聡　訳

第六九章

法と女性的自然原理との結びつきについて右で考察を行った。それによって、法を与える者イシスがエジプトの女性支配にとって重要な意味を持つことが明らかになったのである。そしてナイルの地に、否リビア全体に、かつて母権制が存在していたことを証明するために必要な資料は全てまとめて呈示した。こうしてみるとダナオスの娘たちがこのナイルの地に由来するのはもはや不思議でも不可解でもあるまい。彼女たち自身、あのリビアのアマゾン的世界の一部をなしているのであり、勇敢な女戦士なのであって、横暴な従兄弟たちに対して自らの女権を防衛し、血の婚礼によって最高の勝利を祝うのである。その身の毛もよだつ行為はアマゾン主義の精神に全くかなっているのであって、崇高な女権を維持し、男性的なもの全てを憎悪し、闘いと血に対する喜びにそのもっとも純粋な、それどころか神意に添った表現を見いだすのである。おのれの性たる女性の法を裏切る卑怯なヒュペルムネストラは、こうしてみると何と軽蔑すべき者、罰せられるべき者であろうか。オウィディウスは鎖につながれて語る彼女を描いているが、(一)これも理の当然ということになる。アイスキュロスによれば彼女は裁判にかけられるのだが、これも当然至極なのだ。だがしかし、そこでは無罪が言い渡される。これによってダナオスの娘たちの神話は、レムノスの残虐行為の伝説においてヒュプシピュレーがトアスをかばった場面と同じメッセージを伝えているのだ。ヒュプシュプレーの場合と同様に、ヒュペルムネストラにおいても女性的本性はアマゾン的英雄主義の極から本来の節度ある姿へと戻ってくる。ヒュペルムネストラは情け容赦ない傑物とされるよりはむしろ心優しいと言われたい。ちょうどカリアのカペネ(二)や、愛の言葉のみを語るローマのホラティア(三)のように。ヒュペルムネストラが姉妹たちを裏切ったのは愛のためである。彼女は男性的なものへの憎悪を捨てたのだ。万物の中にあって力をふるい、物と物とを結合させる原理であるエロスが、ここで威力を発揮し始めたのである。したがって、ヒュペルムネ

ストラの弁護を引き受けるのはアフロディーテであり、一方、結婚は別としてあらゆる男性的なものに好意を寄せるアテネ女神は勇敢な姉妹たちの方に満足を覚えるのである。アフロディーテがヒュペルムネストラのために行った弁護の中の素晴らしい一部分が残っているが、それはアマゾンに嫌われながらも彼女が選びとった愛が、純粋に物質的で官能的な性格を持つことを強調している。

純情な天は心ひそかに大地との抱擁を、
大地は心切なく天との結婚を願う。
静かにまどろむ天から篠つく雨、
大地は身ごもり、死すべき者たちのために
小羊の草とデメーテルの慈悲深い実りを生み出す。
森の花咲く春を、雨の
初夜が目覚めさせる。どれもみな、私から出たこと。

アフロディーテはこのように語る。(四)そしてこの愛の衝動に目覚めた大地を象徴するのが、花婿をかくまうヒュペルムネストラである。「婚姻(ガモス)〔希〕」は「女(ギュネー)〔希〕」同様、「大地(ゲー、ガー)〔希〕」と関連し、ガイウス・ガイア・夫(ガッテ)・妻(ガッティン)は、エロスに満ちた大地物質と密接に関連する名称である。母権の根拠たるこの物質の一大法則をダナオスの娘たちは――つまりアマゾンは――裏切ったのであり、ヒュペルムネストラはこの法則に立ち帰ったのだった。しかしそれによって母権そのものが打ち破られ、女性支配が葬られる。勝利の絶頂に立った瞬間に女性支配は敗北を喫する。ダナオスの娘たちによる血の婚礼の図が、エウアンデルの息子パラスの腹帯に彫られていたのは、こうした事情の表現であった。(五)勝利の極は行き過ぎの極である。かくの如き勇猛果敢の頂点に女性的本性は立ち続けることができない。女性は本来の節度ある姿に戻り、以後愛によって男に従属することになる。勇敢で猛々しいと言われるよりか弱いと言われたいと思う。これこそヒュペルムネストラがリュンケウスをかくまう行為の意味であり、彼女が無罪となったことの意味であり、彼女自らがアルゴスに奉納したあの「勝利をもたらす者アフロディーテ〔希〕」像の意味するところに他ならない。(六)こうしてヒュペルムネストラはいまやダナオスの第一の娘とも呼ばれるのであり、アガメムノンのクリュタイムネストラがそうであるように、崇高な女主人となる。彼女の女性としての地位が高ければ高いほど、男性国家の新しい法はいっそう確固として立ち現れてくる。母権は最初はこの人物によってあまねく認められるに至ったのだが、今度は同じ人物によって新しい原理の前に退くのである。この婚姻は女性支配の廃墟の上に結ばれたのであり、そこからペルセウスとヘラクレスが生まれる。女のアマゾン主義の後には男の力あふれる英雄的形姿が来る。リビアの女性帝国と戦って没落へと至らしめたのはヒュペルムネストラの子孫たちであった。アルゴス人によってデルポイに奉納された彫像には、(パウサニアス、一〇・一〇・五によ

れば）ダナオス、ヒュペルムネストラ、リュンケウス像が含まれ、「以下ヘラクレスは勿論のこと、さらに以前のペルセウスにまでさかのぼる彼らの一門に連なる者全ての像が並ぶ〔希〕」のである。（七）このつながりに見られる中心思想はいまや明らかだろう。さらにこれら群像がアポロン神殿におかれたことの意味も明らかである。ヒュペルムネストラの一族によって支配権を握るに至ったのは、精神的父権のアポロン的な光の原理なのである。ダナオスの後に支配権を行使するリュンケウスは、（八）自ら光の名を持つ。それに劣らず意味深長なのはアルキテレスとアルカンドロスの名である。彼らはダナオスの娘のうちの二人と結婚する。（九）ダナオス自身アポロン-リュキオスのために神殿を建立したが、ここにダナオスの玉座が奉納されていた。（一〇）その近くにはポロネウスの火が焚かれていた。というのは、火をもたらしたのはプロメテウスではなくポロネウスだとアルゴス人は考えていたからである。（一一）こうしてみると狼と牡牛の闘いもその意味が理解できよう。狼にはダナオスが、牡牛にはペラスゴイの王ゲラノルが見立てられていた。（一二）これらの動物はどちらも男性的力を意味するのであるが――わけても狼はそうで、ローマの厳粛な結婚儀式にあって重要な役割を演じる（一三）――、それぞれ異なる発展段階に属している。すなわち大地的な水力である牡牛はネプトゥーヌス的原理であり、光力である狼は太陽原理である。（一四）したがって前者はペラスゴイの宗教段階に、後者は高度なアポロン的宗教段階に対応する。夜明けと共に狼は牡牛に襲いかかり、殺してしまう。太陽は水よりも強い。特に乾燥したアルゴリスでは灼熱の光によって毎年水が干上がってしまう。その力は非肉体的なものであるが故に、アルカディアのリュカイオン神殿では何人といえども影を落とさないのである。（一五）この太陽原理こそがダナオスの依って立つ基盤であり、精神的男権に勝利をもたらす土台なのである。裁判に勝ったヒュペルムネストラは神殿にアフロディーテ像を奉納したが、その神殿の前に置かれた台座には右で述べた動物の闘いが描かれており、また石を投げて牡牛を追い払う乙女の姿も彫られている。（一六）こうして女は自ら、ヒュペルムネストラが和解したアポロン原理の側に立つ。我々はまたしても父権の勝利が非肉体的な光の原理と一致する様を見る。その段階的発展はアイギュプトスの息子たちの運命に表現されている。彼らの胴体は、デメーテルの大地的母性の支配するレルナの沼地に葬られた。（一七）胴体から切り離された首はアルゴス城壁へ至る道の左側に埋葬されていた。彼らを通して初めて父権の勝利が第一歩を踏み出すのだ。実際プラトンは、古代の神学者たちと同様に（一八）、オリュンポスの神々には〔生贄の獣の〕右側を、半神たちには左側を割り当てているのだから。父権はリュンケウス＝アポロンにおいて完成する。彼は至高の非物質的な太陽力であり、神託に従ってダナオスの義理の息子を五年間の統治の後に殺したが、この行為によって父権を最終的に実現したのであった。（一九）

第七〇章

ペルセウスについて伝説はこう語っている。彼はゴルゴンたちとその女王メドゥーサ――姉妹の中で最も若く、ただ一人死すべき者であった――を打ち負かした。(一)ディオドロスは(三・五二・四)ゴルゴンたちをリビア・アマゾン族の代表としたのだった。ここでも月の原理が高度な太陽権力に屈する様が語られている。なぜならゴルゴンは月の女神であるからで、アテネ女神もその月的な母の性質故にゴルゴーとかボルゴーピスとか呼ばれている。(二)一方ペルセウスは太陽の性質を備えている。ゼウスを父とする彼によって物質的な母権は滅ぼされるのであり、この母権は地下にある青銅製のダナエー(三)の部屋と、海の大波によってセリポス島へ運ばれた箱とに表現をとどめていた。

ポリュデクテス(四)は、ヒッポダメイアへの結婚の贈物として、ペルセウスに西の果てからメドゥーサの首を持ってくるよう命じた。そもそもヒッポダメイアのペロプスとの結婚にしてからが母権の敗北なのだから。(五)英雄ペルセウスは戦利品たるメドゥーサの首をアテネ女神に奉納するが、彼は以前にもアテネの神殿に避難して保護を受けたことがあった。(六)この女神はヘラクレスやダナオスの娘たちやテーセウスを庇護し、母殺しオレステスのためにも無罪の白い石を投票箱に投じたのだったが、ゴルゴンを倒したペルセウスをも安全に保護するのである。こうした性格によりアテネは「ゴルゴン殺し〔希〕」と呼ばれる。(七)こうした性格を持つからこそ彼女はイオダマ(八)を打ち負かす。イオダマ Iodama はその名からしても物質的大地的な月の性質を示している。というのもイオ Io はアルゴス語で月を意味するからだ。(九)なおダマ dama については後に、音節 dam を含む多数の語彙によって「大地」の意味であることを証明する予定である。さて、我々自身最初の頃にはアテネを月の女神と考え、或いはメトローンと結びつけて(一〇)物質的な大地母神と見なしたのだったが、この女神はここでは高度な精神的段階に立っているのであって、ゼウスから母なくして生まれた娘であり、純粋に物質的・母性的・大地的・月的なあらゆる存在に対する容赦ない敵対者であり、純粋に精神的なゼウスの性質を擁護する者であり、それ故ペルセウスの庇護者である。

ゴルゴン及びメドゥーサにつながるのがグライア(一一)である。この名前にも母性が表現されている。というのもグライアイ *Γραιαι* は老女を意味するからだ。老年という観念は母なる特性の一面を示しており、それはすなわち子供たちが目にする側面、自分たちより年上であるという側面なのである。それ故アンナ・ペレンナは神話においては真の「老婆(グラウス)〔希〕」として、皺だらけの老母として現れるのであり、テーセウスをもてなしたヘカレーもしくはヘカリーネ(一二)も同じように描写される。こうした女性たちの持つ月の性質から、全てを石と化すゴルゴン-メドゥーサの力が自ずと出てくる。物質的な母がその胎内から生み出すものはなべて没落する運命にあるのだから。万物がこの世の光を見

るのはやがて母胎の暗闇へと回帰するために過ぎない。生成の後には消滅が来る。母は生を付与しつつ同時に死を贈る。したがって月の顔は醜いしかめ面となり、月そのものがしばしば悪の原理となる。だから、月はまだ物質の領域に、うつろいやすい大地的自然の領域に属すると言われる。ゴルゴンの中で一番若い女〔メドゥーサ〕が死を免れないのはまさにこのためである。なぜなら後で詳細に説明するように(一三)、最も若い女によって一族は最も長く存続し得るからであり、それ故原初から高みへと発展する神話の中にあっても、最後に生まれた女メドゥーサが最も神話を進展させる者となるのである。

没落を免れないこうした物質的な月の性質をはるかに凌駕して、天上の太陽英雄たるペルセウスは不滅の精神を誇る。彼は物質的生を高次の力に従属させ、それによって生を解放したのだった。アンドロメダは彼によって鎖を解かれて岩を降り、メドゥーサの首は戦利品としてアテネに捧げられる。万物を受け入れる冥府の王たるプリュデクテスは太陽英雄ペルセウスに抗することができない。テウタミデスの催した葬礼競技において、アバースの息子でプロイトスの双生の兄弟であるアクリシオス(一四)は、ペネイオス河畔の湿地で孫ペルセウスの手にかかって死んだ。太陽の円盤は物質的な諸力に勝利し、新しい王国が興る。ヘリオスは人類に、精神的父権という寛大で高度な法をもたらすのである。精神的父権はゼウスに、古い母権は大地的物質に由来する。

ペルセウスと同じ性格を持つのがヘラクレスである。ヒュペルムネストラを先祖とする点でも共通している。ディオドロスはヘラクレスについて次のように語っている（三・五五・三）。ヘラクレスは諸国を西に向かって放浪しアフリカにヘラクレスの柱を建てたが、途中でゴルゴンやその他のアマゾン族を完全に滅ぼした、と。ペルセウス神話と同様にここでもリビアや西の国々がアマゾンの居住地とされている。ディオドロスは付け加えて次のように言う。「人間を例外なく幸福にしようと企てたヘラクレスは、若干の民族が軽蔑すべき女性支配下にあるままにはしておけないと考えたのだ。」伝説はこうして、ダナオスの娘たちの始めた仕事をヒュペルムネストラの子孫が完成したと語っていることになる。すなわち女性支配を打ち砕き男権を打ち立てる仕事であって、これはとりわけ人類を解放し高貴で高次な生き方を確立することにつながるのである。女に敵対するヘラクレスの性質は、ギリシア人とローマ人の強調したところであるが、これはガデス-テュロス(一五)の神の伝説にも見られる。シリウス・イタリクスは注目すべき証言を残している（三・二二以下）。

彼らは女たちの接近を禁じ、さらに敷居によって
剛毛の猪が入らないよう注意する。聖壇の前での服装は
誰でも異ならない……
足は裸で、頭髪は剃り、寝床は貞潔である……
炉の火が祭壇を明るく保つ……〔羅〕

さらにパウサニアスが（七・五・五以下）述べていることもこれに劣らず重要である。アジアのエリュトライに著名なヘラクレス神殿があった。そこの神像にはエジプトの技法と思考法が見てとれた。神が舟の上に立っているのである。これは当地の住民の言うところではテュロスからの舟出を表わすものだという。この地に到着すると次のような出来事があった。キオス人とエリュトライ人が神の舟の所有権をめぐって争ったのである。盲目の漁師ポルミオンが夢で見たことを話したおかげでエリュトライ人が勝利を得た。つまり、エリュトライ人の女たちが髪を切り男たちがそれを編んで綱を作り、それで舟を引き寄せるべしというのである。しかし市民階級（アスタイ・トーン・ギュナイコーン）の婦人たちは髪を切るのを拒んだ。すると自由民ながらエリュトライでは市民に仕えて生活の資を得ていたトラキア人の女たちが、この神託に従ったのである。舟は労せずして陸に引き寄せられた。この丈夫な綱はヘラクレスの神殿に保管された。身をもって神託に従ったので、あらゆる女性の中でトラキア人の女だけが神殿に入ることを許された。この話の中には、エリュトライのイオニア人女性が単に市民の妻ではなく自立的な「市民（アスタイ）〔希〕」であるという、女性支配的な状況が示されているが、ヘラクレスが至るところで要求し実現させた女の恭順さが現れているのも非常に重要である。神意に進んで従った従順なトラキア人女性だけが神に気に入られるのである。ヘラクレスはここではあらゆる暴虐的な支配を止めさせる調教師として現れる。ディオニュソスが低い身分にある者たちの解放者として現れたように。女による支配は男によるものよりも抑圧的になりがちだったのだ。

この神話の結末は特徴的である。ポルミオンは視力を回復し、以後再び盲いることがなかった。ここには、他の神話伝承にも見られる陰喩的な表現が用いられている。すなわち大地的母権から父権的太陽原理への移行である。暗闇と盲目は大地物質の属性であり、光と視力は太陽力としてとらえられた男性の属性である。女性優位に対しては常に闘いを敢行するヘラクレスは、それまで盲目だったエリュトライ人に高次の生活という光をもたらしたのであり、そうした生活はここでもまた男性への女性の従属と結びついていることになる。

第七一章

ここで話をダナオスの娘たちに戻すことにしよう。彼女らにまつわるもう一つの神話伝承があるのだ。それは女権崩壊後の出来事である。乙女たちは自らの血なまぐさい所行を、終わりなき永遠の仕事、しかも永遠に実らぬ仕事を太陽なき地の底で行うことで償わねばならなかった。この冥府はオクノスが永遠に空しく縄をなう世界であり、シーシュポスが石を空しく転がす世界であり、ティテュオスが〔鷲についばまれては〕永遠に甦る肝のために終わりなき苦しみにのたうつ世界である。（一）おぞましき罪を償う彼らの中に、穴のあいた容器を前にしたダナオスの娘たちが混じるようになるのは、女性支配やアマゾン主義と縁の切れた時

代になってからの話である。彼女らは罰せられ永遠の苦しみを負わねばならないとする思考法は、後代になって初めて登場する。しかし彼女らは贖罪すべしという思考法が後代に生まれたと主張するからといって、穴のあいた容器に水を汲む神話も同様だということにはならない。彼女らのこの仕事は自然というものの象徴的表現なのであり、この表現こそオクノス神話同様に人類最古の観念を示しているのである。したがって象徴表現自体は太古のものであり、罰と応報という観念と結びついたことだけが新しいのだ。(二)自然を象徴的に表現する、と私は言った。自然の何をか？それを明らかにするためにアロアダイの神話に言及しよう。

アポロドロス（一・七・四）には次のように書かれている。

「アロエウスはトリオプスの娘イピメデイアをめとった。しかし彼女はポセイドンに恋した。そして彼女は絶えず海に行き、海水を手ですくっては胸に注ぎ込んだ。ポセイドンは彼女に近づいた。こうして彼女はポセイドンの子オトスとエピアルテスを生んだ。この二人はアロアダイと呼ばれている。」この神話では水は生殖の素として、男性生殖力の担い手として現れている。だからこそイピメデイアは絶え間なく水を胸に注ぎ込むのである。トリオプスの娘である彼女は、生殖に焦がれる大地物質の象徴である。プルートスの後を追いエロスを受胎したかのペニアのことをプラトンは伝えているが(三)、イピメデイアもこれと同じなのだ。花から花へと蜜を集めてまわる蜂と変わるところがない。(四)ペニアはプルタルコスが言うように、(五)「それ自体は貧しいが、絶えず善に満たされ、善を追い求めて結合に至る物質」に他ならない。したがって、生殖をもたらすネプトゥーヌス・ゲネシウス(六)に恋焦がれるイピメデイアは、水を汲むこのトリオプスの娘は、はらませる水に浸された大地である。ダナオスの娘たちもまさしくこれと同じなのだ。彼女らが水瓶の中身を空ける大きな容器は、美術では膨らんだ瓶として描かれているが、大地そのものであり、絶えざる生殖に恋焦がれる物質なのである。イピメデイアが水を胸に注ぎ込むように、ダナオスの娘たちは水を大きな容器に注ぐ。だが絶えざる生殖を求める大地の渇きは収まることがない。ペニアはプルートスの後を止むことなく追い続ける。だからこそイピメデイアは絶え間なく海へと降りて行くのだし、メガラの女たちはいわゆる佳人たちの歩行を行うのであり(七)、シリアの神像は海へと向かうのである。(八)同様にダナオスの娘たちは絶えず水を大地の容器に汲み上げるのである。まさにそれ故にこの容器は穴があいているとされるのであり、それはヴェスタの女神官が同様の意味で持っている濾し器に穴があいているのと同じことなのである。(九)したがって、水を汲む乙女の姿をとるダナオスの娘たちは太古における自然の象徴的表現であり、贖罪や罰の観念とは本来全く無関係であったとの私の主張には、十分な根拠があったことになる。

さらに付け加えておきたいのは、こうした自然の象徴的表現にこそナイル宗教の根本理念が原初的で素朴な形でとどめられており、またこの宗教観念とナイルの地自体との物質的関係が示され

ているということである。というのも、プルタルコスが言うとおり、(一〇)オシリスはナイル河であり、毎年氾濫する時期にイシスたる大地はこの河を受け入れてその水を保持し、穀物を育むのだから。なべてを生み出すための、水と乾いた大地とのこの結合を象徴的に表現しているのが、かの金の小箱である。これは毎年オシリスが姿を消す際に喪の儀式を行ったのであるが、その時神官たちが厳かに持ち運んだものである。この小箱には初めに飲用水が注がれ、それからその水に豊饒な土が混ぜられる。(一一)このように水が大地によって吸い込まれるとオシリスは姿を消し、イシスつまりナイルの地ははらむのである。してみると、水を汲むダナオスの娘たちと穴のあいた容器という象徴表現ほどに、エジプト宗教の根本理念を具体的かつ簡単に表現している、否、目の当たりに示しているものはあり得ないことが分かるだろう。太古の世界は物質生誕の秘密(ミュステリウム)をこのように理解していたのである。ホメロスとターレスは万物の根源は水だと述べたが、こうしてみるとこの説がエジプト宗教に示唆を受けたものだったとギリシア人が主張したのも、理由のないことではなかったのである。これこそが、ダナオスの娘たちがアルゴスの女たちに伝授したというあの密儀(ミュステリウム)だったのだ。これこそがレルナの密儀の意味するものであり、ダナオスの娘たちの話と乾燥したアルゴリスを潅漑する話とを結びつけた神話ができたのもこうした思考法が下地にあったからである。(一二)

このように考えるならば、工芸品や墳墓に見られるようなダナオスの娘たちとオクノスとの結びつきも、そして両者が大地の暗い奥底に追いやられた理由も理解されるのである。というのもオクノスが縄をなうのは自然の象徴的表現であって、ダナオスの娘たちと全く同様の意味を持つのであるから。縄とは、水と大地のあの結合が物質から生ぜしめた被造物であり、この被造物は川が海に向かって流れるように死に向かって急ぐのである。それ故にこのオクノス象徴が他ならぬナイル河畔に見いだされるのも不思議ではない。ディオドロス(一・九七・二―三)の伝えるところをそのまま引用しよう。「ナイル河の向こう岸、リビアに向かってメンフィスから百二十スタディオン離れたところにあるアカントスの町には、穴の開いた容器があり、それに毎日三百六十人の神官がナイル河から水を運んで入れるとのことである。オクノス神話の伝える行為が(一三)厳かな儀式で執り行われるのを、今日でもなお見ることができるそうである。すなわち一人の男が大きな縄の端をより合わせる一方、他の多くの者がより合わされた縄を後ろから再び解いてしまうのである。」

このように穴の開いた容器とオクノスは並んで現れており、両者ともナイルの地に固有のものとされている。このことは、この二つの自然の象徴的表現にはナイル宗教の根本理念がその基底にあり、それ故両者とも恐らくはエジプトで成立したのであろうとする私の説を反論の余地なく証明するものだ。縄をなうのが一人であるのに対して解こうとする人間が複数に渡っているのは、物質的生が成立する根拠は一様であり常に同じであるのに対し、死

の原因とあり方が多様だからである。デルポイの集会所には縄を解く男たちの代わりに縄を食む雌ロバが描かれていたし、後代の美術工芸品でもそうであった。（一四）この事実もまたエジプトを指し示している。何故ならエジプトでは、破壊と解体の原理すなわちテュポンが、ロバの姿で描かれたからである。（一五）死は大食漢だ。ミュルミドンの息子エリュシクトンは（一六）それ故 κατ-βιον、すなわち「大いなるロバ」と呼ばれるのである。（一七）パウサニアスは縄を食むロバが雌であることを強調している。（一八）それに対してオクノスの生殖力は男性として捉えられている。この対照は極めて注目に値する。生成と結びつくのは男であり、消滅と結びつくのは女である。男は生命を与え、女は死として万物を受け入れる。永遠に水を汲む仕事は続き、永遠に大地物質は体内から新しい生命を生み出す。たとえ死がどれほどのものを引きさらっていこうと、絶えず新しい新鮮な血がめぐってくる。

したがって、死んでしまった者の数は年ごとに増し、解かれた縄の長さは長くなる。生は死に糧を与え、オクノスはロバに餌を与える。ロバは心地よくゆったりと縄を食み続ける。「火に木材が不足することはなく、海に水があり余ることはなく、死に生物が欠けることはなく、美女に崇拝者が多すぎることはない」とピンズー教の賢人たちは言っている。（一九）それ故古代人は死者を「より多くの者たち〔希〕」と呼んだ。ローマ人も「より多くの者たちのもとへ行く〔羅〕」という表現を「死者たちのもとへ召喚される」意で慣用的に用いた。メガラ人が得た神託はよく知られていよう。すなわち国王制を廃止したがために国内が混乱に陥った時、メガラ人はデルポイに人を派遣し、国の繁栄の基礎を築くために何をなすべきか神託をうかがったのだった。より多くの者たちと協議せよ（「彼らがより多くの者たちと協議するなら〔希〕」）というのが答であった。そこでこの神託を正しく解釈した結果、評議所の真ん中に死者のためにヘロオーン〔英雄たちの墓〕が建立されたのである。（二〇）こうした多数決は恐らく今日の民主主義の好まぬところであろう。しかし死者と協議することは民の幸福の最も確かな保証であり、我が歴史法学派の大いなる合言葉なのである。

さて、ヴェルカーは、ダナオスの娘たちとナイルの地との関連は〔エジプトの〕ケンミスの神官たちに創作されたものとしているが、（二一）オクノス神話も同様に系譜上の理由から同じ神官たちによってエジプト起源とされたのだと考えるべきかどうか、その当否は私には分からない。しかしそう考えた方が、エジプトとアルゴリスのとの結びつき、そもそもギリシア種族との結びつきがうまく証明されるのではなかろうか。古代民族について考察する際に個々の種族を他から切り離す者には勿論、同じオクノスがマントゥアのリギュアス人に、アルデア（二二）に、デルポイに、そしてナイル河畔のアカントスに見られることはなはだ不可解と思われるであろう。しかしこの事実は、ダナオスの娘たちに関する事実同様厳然として存在するのであり、またヘロドトスがギリシア神話とエジプト神話の関連について述べていることとも合

わせるなら、歴史以前のいわゆる神話時代に諸民族がどういうつながりを持っていたかについて、現代の我々の理解がごく限られたものであることが白日のもとにさらされるだろう。

したがってダナオスの娘たちの神話には、私の解釈によれば、イシス宗教の根本理念が、そしてそれと共に母権そのものの根本理念が含まれている。なぜなら女は物質的生の継続にとっては大地の代理人なのであるから。女は物質の機能を引き継いだのであり、「大地（ゲー）〔希〕」は「女（ギュネー）〔希〕」となったのである。太古の物質的思考法によれば、男に勝る女の名声は、オシリスに対するイシスの優位は、まさにこの点に基づいている。そしてそれ故にこそ、極度のアマゾン主義の形をとった母権と宗教的基盤としての母権とが同時に、したがって統一的な観念として現れていることは非常に注目に値するのである。前者の母権は法的国家的形態を表わし、後者は宗教的表現となっている。古い神話の本質は、人間を支配し人間が奉仕すべき神々の名を、人間に付与するところにある。例えばアリスタイオス（一三）は自らゼウス・アリスタイオスに、ロムルスはマルス或いはクゥイリーヌス（一四）にアレクサンドロスはアモンとなり、リュクルゴス、ギュゲス、ブラシダス（一五）は己れの民族の神となる栄誉を与えられ、イシスの名で呼ばれた女も一人ならず存在したのである。卓越した人間の姿を借りて神は顕現する。人間の内にこそ神性は認められ、人間の形で神は目に見えるものとなる、とはプラトンとプルタルコスが繰り返し述べた考え方である。かくしてダナオスの娘たちも、彼女らの母権や女性支配、そして血の凶行すらをも生み出したあの宗教の光に包まれて後代に伝えられたのである。彼女らは死すべき人間であると同時に神であった。女権を冒瀆的な攻撃から英雄的勇敢さで防御する実在の種族を代表する者たちであったと同時に、アマゾン宗教の基盤が形となって表現されている神でもあったのである。

第七二章

この〔エジプトの母権という〕論題から離れる前に、最後の考察を付け加えておきたい。エジプトでは女はいかなる神官職にも就くことがなかった。女神の神官であれ男神の神官であれそうだったのである。ヘロドトスは（二・三五）そのように証言しているし、事実彼の時代にはそうであったのだろう。あらゆる神殿を訪ねて回ったヘロドトスがかくも重要な点で思い違いをするなどということがあり得ようか。（一）しかしこの点に関しては若干の問題があることを私は黙過しようとは思わない。ヘロドトスは或る箇所で（二・五四）フェニキア人に誘拐されたテーバイの二人の巫女について語っている。また別の箇所では（二・一七一）テスモポリア祭をギリシアに伝えたダナオスの娘たちに言及している。ヘロドトスが自ら矛盾したことを述べるとは考えられないから、彼はこれらの女性を巫女ではなく、単に清祓された信者と見ていたに違いない。（二）家庭での祭祀と公の行列には女性も参加していたが、（三）これは女性の神官職就任とは無関係である。

女性が神官職に就くのはようやくラゴス王朝時代になってからのことである。(四)これは神官の戒律への侵害であって、土着の神官階級の顰蹙を招きはしたものの、阻止されることはなかった。またプトレマイオス五世エピパネスの栄誉を讃える際に、神官団は教令の中でその点に触れざるを得なかった。(五)したがって〔女性神官職なしとした〕ヘロドトスは完全に正しかったということになる。

それ故エジプトには、注目すべき対立を示す二つの現象が見られたことになる。すなわち一方では女が高次の権力と全ての支配権を所有し、他方では男が神官職を独占したのである。これは互いに相容れないものであろうか。否、決してそうではない。私はむしろこの一見矛盾するように見える現象に同じ根本思想の二つの現れを認める。女の物質的質料的性質は、一方では生の物質的身体的側面を全面的に支配する母権を生み出すが、他方では女の聖職就任を不可能にもするのである。なぜなら聖職にあっては人間の身体的物質的側面ではなく、非肉体的で高次の部分が活動するのだから。すなわち次のように言えるであろう。精神的領域では男が支配し、物質の領域では全般にわたって女が支配すると。

この対照がテーバイの神官職にあってはことのほか明瞭に現れていた。この地の神官たちは哲学と天文学において最高の知識を究めたとの評判をかちえていた。太陽暦とその正確な算定は彼らに始まる。しかしまさにそのテーバイで、極めて身分の高い女性が「妾（パラキス）〔希〕」としてゼウスに捧げられ、売春が神聖な祭祀儀礼となっていたのだった。(六)物質的なもの全てが大地に帰属させられるなら、大地の方もまた物質的なものに過ぎないとされる。逆に男は物質から締め出されるが故に、精神的なものはそっくり男のものとされる。プラトンは物質に及ぼす男の作用を非物質的なものと言っている。(七)別の箇所ではこの作用は単に「呼び覚ますこと〔希〕」と捉えられており、火打ち石の中に眠っている火花を呼び覚ます鋼鉄の力に喩えられている。我々は実際アジア北部の若干の遊牧民族について次のような事実を知っている。若い二人を結婚させる花嫁の父は、その式において鉄の棒で小石を打って火花を出すのである。これは花嫁の父が子孫を望んでいることを示すためのものである。(八)ピュタゴラス派は女を三角形の底辺、つまり水平な底線に、そして男をその上に降ろされた垂線に喩えている。プルタルコスの「イシスとオシリス」に挙げられているこれらの比喩は全て(九)、同一の理念を物語っている。すなわち女は人間存在の物質的基礎であり、男は非物質的な力として女と対をなす。女が材料だとすれば、男は工作者なのだ。(一〇)女が大地の立場であるとすれば、男は創造主を想起させる。創造主は、ちょうど陶工が陶器を作る時のように、外部から作用する目に見えない力として大地に向かってゆく。こうした考え方に従えば、神官として神に関わることができるのは男だけであり、女ではない。女は物質的生に属するのに対し、男は非物質的な力に属するのだから。

したがって、母権制と男による神官職の専有という二つの原

理は、決して互いに相容れない矛盾として現れているわけではないが、さりとてこの二つが同時に成立したとは考えられない。両者が認められたのは同時ではなく、時間的な前後関係をおいてのことであったに違いない。無論両者は長きにわたって、そしてヘロドトスの時代にあっても並存し、それぞれの領域で力を振るったことは疑い得ないけれども。男の持つ高い精神的な性質を自覚したところに人類の一大進歩があり、太古に人類を完全に支配していた純粋に物質的な思考法から解放されるきっかけがあったのである。それ故、エジプトの神官職を支配する原理もまた、ナイル宗教が次第に高度化してあの高き精神性に到達するとともに、ようやく一般的になったのであろう。たとえヘロドトスの時代には認められて久しかったにせよ、その原理が太古以来のものだとは私は思わない。実際男性神官の手にかかってのみ、神学も世俗の学もあの高みにまで上り得たのだし、神の認識もあの形而上的な精神性の水準にまで到達することが可能だったのである。この水準こそが、ピュタゴラス、ソロン、リュクルゴス、プラトン、エウドクソス、デモクリトス、オイノピダスのような(一一)、ギリシア人の中でも最も深い思索家たちの目をエジプトへと向けさせたのだった。(一二)女神官であったならこうしたことは不可能であったろうし、人類の向上に何の寄与ももたらさなかっただろうことは確実である。

キリスト教世界も、明らかに太古の思考法や祭祀の影響下にあった。恐らくは最初はエジプトや、隣接のオリエント地域すなわちアラビア・プリュギア・クレタにおいてそうだったためであろうが、またも女性的物質原理が前面に出てきており、この傾向はキリスト教世界に何らの利益ももたらさなかったのである。なぜならそれは、神の認識をその精神的な純粋さから物質の汚濁へと引きずり降ろすことであるからだ。カルトゥジオ修道院の創設者たるロベール・ダルブリッセル(一三)が男女修道士たちの長に男ではなく女をすえたのは、キリストがマリアをヨハネの母としたためであったが、(一四)彼はその考え方において、女性の本質と神官職とを相容れないものとしたエジプトの神官たちより原初的なところにいたと我々は認めざるを得ない。〔バラモン教の神官たる〕ブラフマンはもっと進んでいて、彼らには宗教上の秘密を妻に打ち明けることが禁じられていた。(一五)「ブラフマンは妻に、共に哲学に携わることを許さなかった。それは、女たちは素質上徳性に劣るが故に教義上の秘密を聖別されていない一般人にしゃべる恐れがあったためか、(一六)或いは影響を受けやすい心の故に夫のもとから出奔するかも知れないからである。実際、快楽と苦痛、生と死を見下すことを知った者は、他人の臣下たることに断じて甘んじてはいられないからである。」ちなみにブラフマンは太陽に身を捧げていた。(一七)一方インドの賢者の第二階級は、ストラボン(一五・七一二)がメガステネスにならってガルマナイと呼んでいるが、彼らについてはネアルコス(一八)が正反対の習慣を伝えている。「彼らはとりわけ自然研究に打ち込んでいる。カラノス(アレクサンドロス大王を扱った歴史家たち

によって有名になった偉大な殉教者）はその一人であった。彼らは妻が共に哲学に携わることを認めていた。」マヌの法典にはこう記されている。(一九)「(一五五) 夫がいなければ妻は犠牲を捧げることも、神聖な儀式を執り行うことも、断食をすることも許されない。妻は夫を崇める限りにおいてのみ、天国に入ることができる。(一六〇) 禁欲的なブラフマンと同様に貞潔な女は天国へ行くことができる。たとえ彼女が子供をもうけなかったとしても、主人の死後も敬虔な節制に努める限りは。」

キリスト教の教義内容をパウロは「テモテへの手紙」第一で(二・一一―一五) 極めて簡潔に説明している。「女は全く従順な気持ちで心静かに学びなさい。でも私は女が教えることも、思い上がって男を見下すことも許しません、女は心静かにしなさい。なぜなら最初にアダムが、その後でエヴァが創られたからです。そしてアダムが誘惑されたのではなく、エヴァが誘惑され、罪を犯したのです。しかし、つつましく信仰と愛と清らかさを守り通すならば、女は子供を生むことで救済を手に入れます。」(二〇) 使徒パウロの思想は次のように言い換えることができる。つまり、精神的で第一義的な特性故に男は教えを授けるにふさわしく、女は物質的で第二義的な特性故に子供を生むにふさわしい。物質的な生の領域におけるのと同様に、女性たちは精神的な領域においても純粋に受動的であって、高次の原理たる男をじっと仰ぎ見るように定められている。女は男を物質へと引きずり降ろしたが、一方男は女を物質から精神の純粋さへ、「近づくことのできない精神の光」(二一) のもとへと引き上げる。しかし受け入れることのみを定めとし、そのために男より劣る存在である女は、何かを固守し維持することにかけては男以上の忠実さと不動の力を示すのである。「女たちが福音の教えを受け入れる時、彼女たちは男よりも信仰において揺るぎなく一途であり、不撓不屈の態度で持ちこたえる。」こうしたルターの言葉(二二) は宗教の歴史によって繰り返し裏づけられている。キリスト教を信仰する何千という女性殉教者はその雄弁な証しである。デキウス帝の時代、デニサはキリスト教を信ずるとしたためにラムプサコスで迫害されたが、ペテロが拷問に屈するのを見て、こう叫んだ。「心貧しき人よ、なぜあなたは一時の幸福と地獄の責め苦とを引き換えになさるのですか！」(二三)

こうして、女は身体的精神的に同一の性格を保持している。この変わらぬ特質に女の強さと弱さがある。エヴァ-パンドラは死すべき人間に呪いをもたらしたが、一方で最初に救済の欲求に目覚め、聞き取った言葉を最も忠実に守り、それを子供たちの魂に刻み込むことによって最初の逸脱と罪をあがなうのも同じ女性である。子供を生み子供に信仰を植えつけることによって女性は、使徒パウロの表現を借りれば、己れの救済を手に入れる。これは、右で引用したマヌの法典にも類似の表現が見られる点で注目すべき思想である。最初にキリスト復活の秘密を探り当てたのは女たちであり、使徒らにそれを教えたのも女たちである。(二四) それは、ゼウスが太母神テミスから、最初はこの女神のみが知っていた秘

儀を教えられたという神話や、女こそが神の啓示を受けるにふさわしいと古代人が信じたことと軌を一にしている。

第七三章

古代神官職に関する〔男のみが就き得るという〕原則と比較可能な現象が今日のギリシアに見られる。若干のギリシアの島々について次のような事実が報告されている。「これらの島々では、女に由来する財産は法律上嫁資という名目で女性に受け継がれる。そこではただ一人の娘が嫁資の全てを、たとえそれが家族の全財産だとしても、独り占めする。礼拝堂だけはその例外である。なぜなら、たとえ礼拝堂が一人娘の嫁資の一部だとしても、それは最終的には男子卑属の相続分としなければならない。」(一)こうした慣習法は、その内的な根拠においてではないにせよ結果として、女権との類似を示している。どちらの場合も全財産は母から娘へと渡る。息子たちは全く無一物で家を出ていく。だが礼拝堂は別の法に従う。礼拝堂は、エジプトの神官職と同様に必ず男のものとしなくてはならない。なぜなら女性は公的な宗教儀式に参加することができないからである。